

存在することと無から生じること

星 野 徹*

物は時間部分を持つと主張する四次元主義によれば、物が持続的に存在するとは、物の時間部分が連続的に生成消滅を繰り返すことに他ならない。時間部分が生成し、消滅するとはどのようなことなのだろうか。生成消滅を繰り返す物からなる世界という世界像を受け入れる理由はあるだろうか。検討してみたい¹。

I 過去の痛み

歯医者で歯を削られながら、歯を食いしばることもできず、口を開いたまま痛みを耐えているとしよう。ストア派の哲学者の誰かが、自分の意のままにならない出来事は、自分がそれを望んでいるのだと思うようにすればよいと言っていたことを思い出し、「自分は今、歯の痛みを望んでいるのだ」と心の中でとなえたとしても、痛みは軽減しないし、痛みを愛するマゾヒストになれるわけでもない。苦痛から解放されるには、歯の治療が終わり、痛みが去るのを待たなければならない。歯を削るドリルの音と振動がやみ、痛みが退いたときにはじめて「やれやれやっと終わったか、終わってよかった」と心の中でつぶやくのである。それでは私はいったい何に対して安堵しているのだろうか。痛みの最後の部分が「終わってよかった」とつぶやく時点より前の時点に位置していることに対してだろうか。それとも、それが2013年12月18日午後4時ちょうどに位置していることに対してだろうか。もちろんそうではない。私は自分の心の中のつぶやきをことさら意識していたわけ

ではないし、今が2013年12月18日午後4時であることを知らないかもしれない。また、歯の治療が2013年12月18日午後4時に終了することをあらかじめ知っていたとしても、そして、歯を削られている最中にそのことをずっと意識していたとしても、ドリルの音が響き、痛みが続いている間は安堵の気持ちなどわいてこない。プライアーによれば、嫌な出来事が過ぎ去ったことを喜ぶとき、人は出来事が終わったこと、すなわちそれが過去となったことに喜んでいるのである。「終わってよかった (Thank goodness that's over!)」という誰でもが日常的に抱く思いが、過去、現在、未来という時制が出来事間の前後関係に還元不可能であることを示しているのである (Prior, 1959, 1996)²。

プライアーの問いに対して、時制の存在を認めない時制に関する還元主義者にはそれなりの解答がある。安堵の気持ちが痛みの後にやってくることは確かに必然的なことではないかもしれない。しかし、痛みが過去となったときにそれがやってくることもまた必然的なことではない。私がマゾヒストだったならば、痛みが過去となったときには、安堵ではなく残念な気持ちがこみ上げてくるだろうからである (cf. Mellor, 1998, chap. 4)。あるいは、歯の痛みから解放されてほっとしている人は、痛みが過去のものとなったという世界に関する事実についてほっとしているのではなく、「痛みが過去のものとなった」と信じたことが原因で、その人に安堵感が生じただけなのかもしれない (cf. MacBeath, 1983)。プライアーの議論が示しているのは、還元不可能な時制に関する信念が存在するということだけであって、還元不可能な時制に関す

* ほしの・とおる

埼玉大学教養学部教授、哲学

る事実が存在するという事ではないのかもしれない。

時制の実在をめぐるこうしたA理論とB理論の対立についてここで論じることとはしない。あの痛みは過去のものであるという端的な事実が成立しているのかもしれないし、単に私が「あの痛みはもう過去のものだ」と信じているだけなのかもしれない。しかし、いずれにしても、私は歯痛が過ぎ去ったと思っており、歯痛が過ぎ去ったことにほっとしていることに変わりはない。問題にしたいのは、なぜ私は歯痛が過ぎ去ったことにほっとするのだろうかということである。

それはもちろん過ぎ去った痛みはもう痛くないからである。さらに、付言すれば、私は苦痛を好むマゾヒストではないからである。過去の痛み、あるいはこう言ったほうが良ければ、以前の痛みは痛くない。そして、痛みの本質が痛く感じられることにあるとすれば、痛く感じられなくなった瞬間に痛みは消えてしまったということになるのではないだろうか。過ぎ去った痛みは消えてしまってもう存在しない。私は痛みが存在しなくなったことに対して「よかった、よかった」と喜んでいるのではないだろうか。

歯の治療を終えた私は、これでしばらくの間は歯痛に悩まされることもないだろうと思っていたところ、まもなく反対側の歯が痛みだしてきた。そこで、以前と同じような治療を受けることになったのだが、今度はストアの教えを実践するかわりに、過去の痛みは存在しないのだと考えることによって痛みを耐えようとしてみた。「ドリルで歯を削り始めてからもう1分ほど経っただろうか。過去の痛みは存在しないのだから、1分前の痛みも、10秒前の痛みも、1秒前の痛みももう存在していない。そして、今のこの痛みもすぐに消えるはずだ。存在するのは瞬間的な痛みだけなのだ。」こう考えても、苦

痛は全然軽減されなかった。それに、痛みは生まれては消え、生まれては消えるのだとしても、痛みを感じている私は痛みとともに生まれては消え、生まれては消えているようには思えない。私も、私の前の歯科医も、私が身を横たえている椅子も、診察室もずっと存在し続けているように思われる。ずっと存在し続けている診察室の中にずっと存在し続けている私がいて、その私の中で痛みが生まれては消えているように思われてくる。しかし、どうして痛みは連続的に生成消滅するのに、私や椅子はずっとあり続けているのだろうか。私のこうした考えにはどこかおかしいところがあるのではないだろうか。痛みの存在の仕方と人や椅子の存在の仕方にはどこか異なるところがあるのだろうか。

Ⅱ 痛みと音と猫

多くの人は、痛みが存在するとは痛みが生じることであると考えていることだろう。歯痛が存在し続けるためには、歯をドリルで削り続けなければならない。歯を削ることによって痛みが生み出されているのである。虫歯による痛みの場合も、何かが歯の神経を刺激しているから痛みが生じているのだろう。それに対して、私や猫や机や山は何かによって生み出されているのではなく、ただ単にそこに存在しているだけであるように思われる。

音についても痛みと同じことが言えるだろう。コンサートホールで音楽を聴いているとき、今聞こえている音はたった今生み出され、聞こえたと思ったらもう消えてしまっている。この音は、今のこの瞬間にしか存在していない。音の高さや音色が目まぐるしく変化する音楽を聴いているときだけでなく、同じような音がずっと続くような場合でも、やはり、今のこの音はこの瞬間に生み出されたものであるように思われ

る。

音の科学に疎い人でも、音がどのように生み出されるか知っている。この音はあのヴァイオリニストがヴァイオリンの弦を擦ることによって生み出しているのであり、また、この音はあの歌手が声帯を震わせることによって生み出しているのである。ヴァイオリニストがヴァイオリンを弾くことをやめ、歌手が歌うことをやめれば、音は存在することをやめるだろう。

それでは、痛みや音が瞬間的に生成し、消滅するのは、痛みや音が他の何かに生み出されることによって存在するような種類の存在物、いわば随伴的存在物だからだろうか。そして、われわれが、痛みや音が生まれては消え、生まれては消えるようなものであると考えるのは、われわれが、痛みや音の生成のメカニズムについてある程度の知識を持っているからなのだろうか。

ここで、痛みだけからなる世界と音だけからなる世界をそれぞれ考えてみよう。痛みには通常身体像が伴う。そして、身体の中の部分に痛みが生じているか、通常の場合はおおよそその見当がつく。しかし、話を単純にするために、身体像抜きの痛み世界が存在すると仮定してみよう。その世界では、痛みの強さと質が刻々と変化する。あるときは間欠的な激しい痛みが、別のときには持続的な鈍い痛みが続いて行く。音だけの世界では、音色と音の高さと音の大きさが刻々と変化する。どちらの世界にも、物も他人も存在しない。あるのは変遷する痛みの体験と聴覚体験だけである。したがって、痛みや音が世界の中の何かによって生み出され続けているわけではない。どうしてかは知らないけれども、痛みや音が続き、時には止み、そしてまた再開するのである³⁾。

痛み世界では、時がたてば、同じような強さと質の痛みが再びやってくるだろう。しば

らく無痛の時間帯が続いた後に、脈動性の強い痛みがまた襲ってきたとしよう。今生じているこの痛みは、先程の類似の痛みと同じものだろうか。さっきの痛みそのものが再び姿を現したのだろうか。それとも、この痛みは先程の痛みとはそっくりではあるものの別のものなのだろうか。音世界でも同じようなことは起こりうるだろう。長い間には、同じような音が何度かやってきてもおかしくはない。それでは、以前とまったく同じ音色と高さと大きさの音が生じた場合、数的に同一の音が再び現れたのだろうか、それとも、それは、質的には同一の、しかし数的には異なる音なのだろうか。また、時計の秒針の音のような単調な音が繰り返し生じるような音世界において、生じる音は数的に同一のものだろうか、それとも別個のものだろうか。

物や人や動物が存在する現実世界では次のような類似の疑問が浮かぶことがあるだろう。一匹ののら猫が茂みの中へ入って見えなくなってしまった。あの猫はどこへ行ったのだろうかと思ひながらしばらく茂みの中の様子をうかがっていたところ、先程の猫と同じような顔の猫が茂みから姿を現した。その猫は、顔だけではなく、大きさも、毛の色も、さらに鳴き声も先程の猫とそっくりだとしよう。茂みから出現した猫は、茂みの中に隠れたあの猫と同じ猫だろうか、それとも、あの猫とは瓜二つの別の猫だろうか。

猫についてならばこうした問いは意味のある問いである。たとえ見た目で識別はできなくとも、この問いには明確な答えがあることを誰もが知っている。茂みに入った猫は、茂みの中をしばらくうろついた後に再び顔を出したのかもしれない。また、猫にはそっくりの兄弟がいて、再び出現したのはその兄弟猫の方かもしれない。たとえば、茂みに入って行った猫を尾行していた人がいるとすれば、その人には、その猫が再び茂みから出てきたか否かがわかったはずであ

る。

ところが、痛みや音となると、同じような性質の痛みや音が時を隔てて再び出現した場合、それらは数的にも同じ痛みや音か、あるいは数的に異なる痛みや音か、という問いにどのような答えるべきか、あるいは、この問いがどのような意味を持つのか、まったく明らかではない。一度消えたように思われた痛みや音が、実は、消えたように思われていた間にもどこかに存在していて、しばらくした後に再び出現した場合には、それらは質的にだけではなく数的にも同一のものであり、痛みや音が完全に消えてしまった後に再び出現した場合には、それらは数的に別個の痛みや音である、と言うべきなのだろうか。しかし、純粋に痛みだけの世界や音だけの世界において、消えたように思われる痛みや音がどこかに潜んでいる場合と、本当に消えた場合の違いなどあるのだろうか。

それでは、同じような痛みや音が連続的に存在し続けていれば、数的に同一の痛みや音が連続的に存在し続けている、とみなしてよいのだろうか。物や人や動物の場合はどうだろうか。同じような性質を持った物が時間的にも空間的にも途切れることなく存在し続けていれば、数的に同一の物が存在し続けていると言ってよいのだろうか。

一部の哲学者は、時空連続的に同じような性質の塊が存在し続けていても、数的に同じ物が存在しているとは限らないと主張している。目の前にずっと座っている猫、あれは同じ猫なのだろうか。そうではないかもしれない、とそうした哲学者は言う。全能の神があのか猫を気に入らず、消滅させたその瞬間に、対立するもうひとりの神が、先程の猫がいた場所に、先程と瓜二つの猫を創り出したかもしれないからである。そのようなことが生じていたとすれば、目の前には二匹の猫がいたことになるだろう。あらゆ

る性質を共有する二匹の猫が時間的に踵を接して存在しているのである⁴。

こうした哲学者の説に賛成するか否かは別として、すくなくともわれわれは哲学者の言い分を理解することはできるだろう。では、同じような痛みや音が連続して現れている最中に、神がひそかに別個の痛みや音とすり替えていた、などということがありうるだろうか。痛み世界や音世界に存在するのは、痛みと音だけである。痛みや音以外に、それらの原因となる物や、痛みや音の媒介となる物質があるわけではない。あるのは現象としての痛みと音だけである。そうした世界において、同じような痛みや音が現象している最中に、数的に別の痛みや音と入れ替わっていた、ということが何を意味するのか、やはりまったく明らかではないと言わざるを得ない。

痛み世界や音世界における痛みや音は、人や猫やボールと類比されるべきものではなく、憂鬱さや悲しみと類比されるべきものである。私が定期的に憂鬱になるような気質の人間だったとしよう。私は決まって午前中は憂鬱な気持ちに襲われ、午後になると気分が晴れてくるのである。毎朝やってくる同じような憂鬱さは数的に同じものなのか、あるいは別のものなのかと問うことを私はしないだろう。私に関心があるのは主に憂鬱さの度合いであって、憂鬱さの個別性ではないから、というわけではない。猫やボールと違って、憂鬱さは、一個、二個、あるいは一匹、二匹と数えることができるような個体ではないからである。

憂鬱さは、喜びや悲しみと同じように、私の、あるいは私の心の状態である。知覚とは異なり、憂鬱さのような気分の直接の原因が外界の出来事であるような場合はまれなことだろう。憂鬱さや悲しみは他の何かによって生み出され続けているわけではない。それにもかかわらず、私

の心の状態は刻々と変化する。憂鬱さはどこからともなく生まれ、そしていつの間にか消えて行ってしまうように思われる。

思考や心的な像も同様である。私の心には様々な考えが浮かんで消える。また、さまざまな人の顔や情景が去来する。強迫観念にとらわれている人には同じ考えが繰り返し繰り返しやってくるだろう。そのように繰り返し現れる観念は数的に同じものだろうか。そうではないだろう。数的に同じ猫が繰り返し顔を出すのとは違い、同じ種類の観念がふと生じては消えるのである。あるいは、一日に何度も似たような心的状態に陥ってしまうのである。また、一日のうちに何度も恋人の顔が浮かんでくるということもあるかもしれない。そのとき、繰り返し浮かんでくるのは同一の人間の顔であるが、そのたびごとに数的に同一の像が浮かんでくるわけではない。何度も美術館に通い、お気に入りの絵を見る人には、毎回数的に同一の絵が現れるだろう。しかし、恋人の顔がふと浮かんでくるとき、その人の心の目の前に数的に同一の像があるわけではない。その人は、強迫神経症の人と同じように、思わず知らず、同じような心的状態に浸りこんでしまうのである。

ただし、痛み世界や音世界が、体験の主体としての心的実体の存在を含意するわけではない。去来する痛みや音だけの世界に、痛みや音を体験する主体としての心を持ち込んでも、心は何の役割も果たすことはない。主体概念が必要となるのは、そして、世界に主体を導入する必要が出てくるのは、現象していない痛みや音が、現象していたときの在り方そのままで今も存在しているという可能性を受け入れるときである。そのとき、痛みや音は他の主体の下に現れているのである⁵。だから、痛み世界における痛みや音世界における音が何ものかの状態だとすれば、それは、強いて言えば、それぞれの世界の

状態である。世界には刻々と新たな状態が生じ、そして消えて行く。世界は刻々と姿を変えるのである。

しかし、果たして、生起する痛みや音に加えて、それらがその中で生起するところの世界のようなものが存在するのだろうか。存在するのは、生起する痛みや音だけなのではないだろうか。そして、世界とは、結局のところは、痛みや音の総体にすぎないのではないだろうか。どうもそうではないように思われる。痛み世界について、あの痛みがなかったら、あるいはこの痛みがなかったら、と思いを巡らすことができる。そして、痛みが全部なくなってしまうたらよかったのに、と思うこともできる。そのとき、世界がなくなってしまう状態を想像しているではなく、世界の中に何もなくなってしまう状態、すなわち、いかなる性質も例化されていない世界の状態が思い描かれているのではないかと思われる。しかしこれは本論とは別の話である。

一方、痛み世界における痛みや音世界における音が個性を持っていると言うことができる。音世界において、時計の秒針のような音が規則的に生起しているとしよう。それぞれの音が生起する瞬間に、これは a、これは b というように、順番に名前を付けて行くことができるだろう。このようにして名付けられた音 a は、音 b と音 c と異なる音ではないだろうか。つまり、a と b と c は数的に異なった音ではないのだろうか。

a と b と c が異なる音個体(sound particular)だとすれば、それでは、a と b と c を弁別するのは、それぞれの音のどのような特性なのだろうか。それぞれの音は、音色も音の高さも音の大きさもまったく同じであるにもかかわらず、それらが別個の存在であると言えるのはなぜなのだろうか。

たとえば、それぞれの音が、a, b, c の順番ではなく、b, a, c の順番に生じたり、c, b, a の順番に生じたりすることも可能だったであろうか。あるいは、a の後の b が生じた時点で、b ではなく c が生じていたり、b が一拍置いて c の時点で生じたりすることも可能だったであろうか。誰もが答えに窮するだろう。三つの音にはそれぞれが生じた時間位置の違いしかないからである。だから、a の後に b ではなく c が生じるという想定には中身がないのである。

同じような音が生じるたびに、これが a、これが b と名付けて行く人は、音が生じた時点によって音を個別化しているのである。そして、このように、それぞれの音が、それらが生じた時点によって個別化されているとすれば、そのとき、それぞれの音は出来事として個別化されているのであり、a, b, c とは個体としての出来事に付けられた名前ということになるのである。

音世界における出来事は、出来事とはある時点における実体の性質例化であるというキムのな出来事像に完全に合致してはない (cf. Kim, 1976)。出来事を構成する、実体、性質、時間の三要素のうち、音世界には実体が欠けることになるからである。しかし、これは何も痛み世界や音世界に固有のことではない。島が生じることも、子供が誕生することも、シャボン玉が消えることも、キムの出来事には属さないからである。ここでも、強いてキムの三要素を用いた言い方に倣えば、音世界においては世界が実体なのであり、世界において特定の音性質が例化されるのである、ということになるのだろう。

ところで、a が出来事だとすれば、a が実際より早く生じたり遅く生じたりすることもありえただろうか。あるいは、実際より高い音だったり、大きな音だったりすることもありえただろうか。これにも明確な答えを与えることは難しいだろう。しかし、これも音世界に固有のこ

とではない。あの地震がもう少し後に起こっていたら、という思いが頭をよぎることはありうることである。さらに、あの地震の震源がもう少し遠かったなら、あるいは、あの地震のエネルギーがもう少し小さかったなら、という思いは誰もが抱くことである。それでは、震源が 100km 東にずれていたならばそれはあの地震だったであろうか。また、地震のエネルギーが半分だったならばそれはあの地震だったであろうか。こうした問いに正解があるようには思えない。出来事が実体と性質と時間の三つの要素によって構成されているとしても、それらが特定の値をとることが、その出来事の本質であるというわけではないだろう。

規則的に生じる音や、刻々と変化する音の場合だけではなく、同じような音が途切れることなく続いている場合にも、特定の瞬間の音を切り取って名指すことができるように思われる。そして、「この音は今のこの瞬間にしか存在しないのだ」と思ってみることもできる。「この瞬間のこの音とさっきのあの音は似てはいても別のものだ。生じている時間が違うからだ」と言う人がいれば、その人はそれぞれの音を出来事として個別化しているのである。

「ある出来事が生じる」という言い方が日常的になされている。私もここまでそのような言い方をしてきた。性質ならば生じることができる。たとえば、ある瞬間に音が生じる。その瞬間に世界は無音の状態から有音の状態へと変化する。無音の状態から有音の状態への変化は世界における一つの出来事である。しかし、その際に生じたのは音である。ある瞬間に、それまで存在していなかった音が生じたことが一つの出来事を成立させているのである。したがって、「出来事が生じる」という表現は正確ではない。生じるのは出来事ではなく性質である。実体に、あるいは、世界に性質が生じるのである。世界

に新たに生じるのは性質だけではない。島や赤ちゃんが生じることもある。そしてそれもまた出来事とみなすことができることは言うまでもない。

出来事は生じるのではなく到来すると言うべきであるように思われる。性質や物は生じるが、出来事は到来するのである。また、性質は時間の経過とともに消えて行くが、出来事は消えない。砲声や地面の揺れは消えるが、第二次世界大戦も東日本大震災も消えることはない。それらは消えたのではなく過ぎ去ったのである。「出来事は到来し、過ぎ去る」と言っても、そうした表現が現在という特別な時間が存在することを含意するわけではない。ある時刻にそれ以前の時間に例化されていない性質が例化されていれば、その時刻に一つの出来事が到来した、と言ってよいからである。

無音の世界に音が生じることが一つの出来事であるように、同じような音が続くことを一つの出来事とみなすこともできる。刻々と変化する音世界の中で、同じ音色、同じ大きさ、同じ高さの音が一定時間続いたならば、一定時間続いたその音を一つの個体とみなすこともできる。あるいは、今日一日鳴り響いた音全体を一つの個体とみなすこともできるし、その中から特定の高さの音だけを取り出して、それらの集合からなる個体を考えることもできる。音世界の音をどのような仕方で個別化するかは任意である。そのように個別化された時間幅を持った出来事からさらに、先程の例のように、ある瞬間の音を取り出してくることができるだろう。このように個別化された瞬間的出来事は、持続する出来事の部分、すなわち持続する出来事の時間部分とみなされることになるだろう。こうして、音世界における音について、対象は時間部分からなるという四次元主義的世界像が形成されることになる。もっとも、音世界は空間的次元を

持たないので、現実世界における四次元的世界像の音世界における類似物、と言ったほうがより正確かもしれない。

音世界や痛み世界から現実世界に話を戻そう。現実の人や猫や山を前にしながら、この人やこの猫やこの山はこの瞬間にしか存在していない、と思ってみることは難しい。人や猫や山は瞬間的存在ではないとわれわれは考えているからである。しかし、目の前にいる旧知の女性について「二十歳の頃の彼女はもういない」と思ってみたり、古くなった車を運転しながら「新車の頃のこの車を運転することはもうできない」と思ってみたりしたことのある人ならばいるかもしれない。その人たちが、単に彼女も車も前とはすっかり変わってしまったと言いたいのではなく、二十歳の頃の彼女も新しかったころの車も消えてしまったと本気で考えているとしよう。さらに、その人たちが、それにもかかわらず、目の前にいる女性や運転中の車が、二十歳だった女性や新車だった車と数的に同一の女性であり、同一の車であると信じているならば、その人は、この瞬間に存在しているのは持続的に存在する女性や車の時間部分である、と考えていることになるだろう。

私は、人や猫や山や車は空間部分だけではなく時間部分も持つと主張する物についての四次元主義は誤りであると考えている。では、上のよう考えることのどこに問題があるのだろうか。

Ⅲ 四次元主義と生成する世界

トムソンは、四次元主義はクレイジーな形而上学であるとして、次のように批判する。

この形而上学によれば次のようなことになる。すなわち、私がひとかけらのチャー

クを一時間前から手に持っていたとすれば、私の手には、白く、円筒形で、ほこりにまみれ、重さを持った、チョークの姿をしており、三分前には存在しておらず、さらに、そのいかなる部分も三分前には存在していなかったような何ものかが握られていることになる。私がひとかけらのチョークを手に持っている間、新しい物質、新しいチョークが、絶え間なく無から存在へもたらされることになる。私にはこれは明らかな誤りであると思われる (Thomson, 1983, p. 213)。

物の持続をめぐる形而上学的問題への対処法として、四次元主義的発想が注目されるようになったのはここ半世紀ほどのことであると思われるが、トムソンが批判するような世界像自体は哲学史上決して珍しいものではない。たとえば、チザムは、18世紀のジョナサン・エドワーズに時間部分の説の先駆を見ている。エドワーズによれば、神は初めに世界を無から創造しただけでなく、瞬間ごとに物を創造し続けることによって世界を維持しているのだと言う。このようにして連続的に創造され続ける物の数的同一性は、結局のところ、神による約定によって決まる。神は自らが創り出し続け、時間軸上に延び広がっているたくさんの物を眺めながら、「これらを一つの物とみなすことにしよう」と決めるのである (Chisholm, 1976, appendix A)。また、神による連続的創造説のデカルトを四次元主義者とみなす哲学者もいるし (cf. Gorham, 2010)、さらには、四次元主義の原型をヘラクレイトスの世界観の中に見てとる者もいる (cf. Lombard, 2010)。

ただし、トムソンの例には四次元主義的世界像として不適切な点がある。手にしたチョークだけが無から生じるわけではない。チョークが

無から生じるならば、それを手にしている私もチョークと同じように無から生じ続けるのでなければならぬはずである。また、現代の四次元主義者が、チョークや人が瞬間ごとに文字通り無から生じると考えているわけでもないだろう。たとえば、サイダーは、現時点の時間部分はそれに先立つ時間部分によって存在へともたらされたのであり、この過程を支配しているのはおなじみの運動法則に他ならないと述べている (Sider, 2001, P.217)。しかし、いずれにしても、現代の四次元主義が、デカルトやエドワーズと、連続的に生成する物からなる世界という世界像を共有していることは確かであるように思われる。

仮に物が生成することによって持続するとすれば、生成の過程を支配する法則はどのようなものでなければならぬだろうか。サイダーの言うように、通常の運動法則によって物の生成は説明されるのだろうか。そもそも、痛みや音だけではなく物も生成するというこうした世界像を受け入れる理由はあるだろうか。まずは、物そのものの生成ではなく、物の状態の生成について考えてみよう。

でこぼこ道を転がり続ける一個のゴムボールがあるとしよう。路面の状態に応じてボールは刻々とその形を変えて行くだろう。ボールにおいて瞬間ごとに新たな形が生じ、獲得されたその形は、次の瞬間には別の形にとって代わられる。ある瞬間にボールが球形をしているからといって、次の瞬間にもボールが球形をしているとは限らない。次の瞬間にボールは石ころに乗り上げてゆがんだ形をしているかもしれないからである。また、ボールが球形性を失ったからといって、二度と元の形に戻らないということもない。ボールに加わる圧力が均等になれば、ボールの球形性は復元されるだろう。

このように、ある瞬間のボールの形が次の瞬

間のボールの形を決定するわけではない。たとえば、ボールがずっと球形をしていたとしても、球形性という性質が自らを再生産しているわけではないということである。ボールの形は、ボールの素材とボールがどのような状況に置かれているかということによって決まってくるのであり、それを決めるのは物理法則である。したがって、ボールが一度特定の形を失ったとしても、ボールがパンクでもしない限り、同種の形が甦る可能性は常に残されているのである。

痛みや音についても同じことが言える。ある瞬間の音や痛みのあり方が次の瞬間の音や痛みのあり方を決定するわけではない。ある瞬間の音や痛みの存在が次の瞬間の痛みや音の存在や非存在を決定するわけでもない。もちろん、痛みや音が自ら後続の痛みや音を生み出し続けているわけでもない。痛みや音は突然消えてしまうかもしれない。また、同じような痛みや音が繰り返してやってくるかもしれない。次の瞬間の音や痛みの存在とそのあり方を決定するのは、次の瞬間の音源や身体の状態であり、それらを決定するのはやはり運動法則を含めた物理法則である。ある瞬間における痛みや音と、後続の瞬間における痛みや音の間には直接的な因果連鎖が存在しないという意味において、それらは相互に独立であると言うことができるだろう。

しかし、だからと言って、エドワーズの世界における物のように、音や痛みが因果的に無力な随伴現象となるわけではない。現実世界における痛みは痛みの主体に鎮痛剤を探させる。また、現実世界における聴覚体験は聴覚の主体に耳をふさがせ、あるいは、音楽再生装置のボリュームを上げさせる。痛みや音は、こうして間接的な仕方であれば後続の痛みや音に因果的な効力を及ぼすことができる。鎮痛剤を飲めば後続の痛みは薄らいでいくだろう。ボリュームを上げれば音は大きくなるだろう。

それでは、ボールの存在そのものについてはどうだろうか。ある時点におけるボールの存在とそれ以前の時点におけるボールの存在は互いに独立しているだろうか。もちろん独立してはいない。ある時点でボールが存在することをやめれば、後続のどの時点においてもそのボールは存在することができなくなるからである。後続のボールとそれに先立つボールは強い依存関係にある。なぜだろうか。また、ボールは失った球形性をもう一度取り戻すことができるのに、ボールそのものがなくなるとなぜそのボールはそれ以降永遠に存在しなくなってしまうのだろうか。神の意志に物の通時的同一性を根拠づけようとするデカルトやエドワーズのような連続的創造説以外に、四次元主義者にはどのような解答が残されているだろうか。

サイダーが言うように、後続のボールが先立つボールから運動法則のおかげで生み出されるがゆえに、二つの間にはこうした強い関係が存在しているのだろうか。こうした言い方が、物の性質に還元されることのない運動法則の存在を含意すると思われるならば、次のように言い換えてもよい。すなわち、後続のボールの存在が先のボールの存在に強く依存するという事態は、広い意味での運動法則によって説明されるのだろうか。そうではないだろう。運動法則が説明するのは、時間とともに同一のボールがどのように変容するかということであり、未来のある時点において、同一のボールがどのような状態にあるかということである。同一のボールが存在し続けることは、ボールに運動法則が適用されるための前提である。

ボールが存在するとはボールが生成することであるとする限り、痛みや音や形や色とは違い、ボールには自分自身を絶えず生み出し続け、あるいは、自分自身にとって代わり続ける特殊な因果的効力が備わっていると考えるほかないの

ではないだろうか。実際、アームストロングは、すべての物には自分自身を生み出す能力があると主張し、こうした通常の因果とは異なる特殊な因果に「内属的因果 (immanent causation)」という名称を与えている (Armstrong, 1997, chap. 5)。

ところで、内属的因果は、数的に同一のボールが存在し続けるとはどのようなことか、という数的同一性についての問いに答えを与えてくれるものである、と解釈されることがあるが、それは誤りである。「自分自身を生み出す」あるいは「自分自身にとって代わる」といった内属的因果の定式化の中に数的同一性の概念が含まれているからである。数的同一性の概念の方が内属的因果の概念よりもより基礎的である。内属的因果の果たす役割があるとすれば、それは、なぜ物は存在し続けるのだろうか、あるいは、なぜ物は突然消えたりしないのだろうか、といった問いに答えること以外にはない。

しかし、「なぜこのボールはこれまでずっと存在し続けてきたのだろうか」と、哲学者ではない、一般の人間に問えばどのような答えが返ってくるだろうか。おそらく、「これまでのところ、このボールに釘が刺さったこともなければ、このボールが車の下敷きになったこともなかったからだ」といった類の答えだろう。「釘が刺さるとどうしてボールはパンクしてしまうのだろうか」「車に踏まれるとどうしてボールはひしゃげてしまうのだろうか」という問いには物理法則が答えてくれるだろう。「パンクしたりひしゃげたりするとなぜそれはボールではなくなるのだろうか」というさらなる問いには「ボール」という言葉の意味を持ち出してきて答えることができるだろう。また、「このボールがこれまで釘も刺さらず、車にも轢かれず無事に経過してることができたのはどうしてだろうか」と問われたならば、ボールが作られたときのボールを

取り巻く状況を記述し、それに物理法則を適用することによって、ボールの生涯を描きだしてやればよいだろう。しかし、「釘も刺さらず、車の下敷きにもならない場合、なぜ同じボールが存在し続けるのか」という問いに何か内実があるようには私には思えない。

何もないところにボールが突然生じたとしたら、なぜだろうと不思議に思うだろう。ボールが突然消滅した場合もやはり原因を問いたくなるだろう。原因への問いが問われるべきなのは物の出現と消滅についてであって、物の持続的存在についてではないと私は思う。この部屋が放っておいても消えてなくなるのはなぜなのだろうか、と問うことは、普通はしない。

ところが、物が存在するとは時間部分が生成することであると考えた四次元主義者にとってはそうではない。四次元主義者は次のような疑問に答えなければならないからである。

人も猫もボールも持続的に存在している。人も猫もボールも時間部分から成るのだとすれば、特定の人や猫やボールの時間部分には特定の人や猫やボールの時間部分が後続していることになる。しかし、なぜ人の時間部分に猫の時間部分が続きたり、人の時間部分に、それと瓜二つの別人の時間部分が続きたりしないのだろうか。この世界が四次元的世界ならば、人の時間部分に猫の時間部分や別人の時間部分が続くこともありうるのではないだろうか。それなのになぜ常に同じ人や同じ猫が生じ続けるのだろうか。また、なぜ私の体全体の時間部分がいつも生じるのだろうか。私の心臓や左足の時間部分だけが生じなくなるといったことがこれまでなかったのはなぜなのだろうか。

こうした疑問に既存の科学は答えてはくれない。しかし、内属的因果を持ち出せばうまく行きそうである。あの猫にもこのボールにも、自分の後続の時間部分を生み出す内属的因果が備

わっている。そして、時の経過とともに自分自身と入れ替わって行く。あらゆる物はそのようにして存在し続けているのである。だから、同じ人や同じ猫がずっと存在しているのである。ある時点でボールがなくなってしまうと、後のどの時点にもそのボールが存在しなくなるのも、ボールがなくなった時点で内属的因果の連鎖が途切れてしまうからである。ある時点のボールの存在が先立つ時点におけるボールの存在に強く依存するのも、前者が後者に内属因果的に結ばれているからである。

しかし、このようにして同一物の持続的存在を説明することによって何が解明されたことになるのだろうか。ある時点におけるボールの存在がそれ以前のボールの存在に依存するのは、単にそれが同じボールだからである。あのとき、あのボールが車に押しつぶされて、ボールでなくなってしまうていたら、今のこのボールは存在しなかっただろう。それは、これがあのときのボールによって生み出されたボールの時間部分であるからではない。このボールとあのボールは同じものだからである。質的にではなく、数的に同じだからである。ボールがなくなると、その後のどの時点においてもそのボールが存在しなくなる。それは、ボールが自らを生み出すことをやめるからではない。単に世界からボールが消えたからである。そうではないだろうか。少なくとも、こう答える方がよほどシンプルではないだろうか。

ボールは刻々と姿を変える。ボールが瞬間ごとに新たな姿を纏うと言いたければ言ってもよいだろう。四次元主義者はここで、ボールが新たな姿を纏うとは、ボールの新たな時間部分が生じることであると考える。ボールの形の変化ならば運動法則が説明してくれる。痛みや音の生成についても自然科学がその機構を教えてくれるだろう。しかし、ボールの新たな時

間部分の生成を説明する法則は自然科学の中にはありそうもない。内属的因果の想定は、生成する物からなる世界と世界における同一物の持続的存在のギャップを埋めるための窮余の策であるように思われる。

内属的因果のようなその場しのぎ (ad hoc) の代物など無しで済ませることができればそれに越したことはないだろう。同一の物の生成を説明する方策が他にないならば、物が存在するとは物が生成することであるとする考えを捨てるべきなのではないだろうか。

子供の顔を見ながら、この子の額にもあと 40 年もすれば皺が出てくるのだろと思うている人がいるとしよう。もちろん、その皺はまだ生じてはいない。その人は、皺だけではなく、40 年後の額もまだ生じてはいないと思うことはないだろう。40 年後に生じる額に皺があるのではなく、目の前にある額に 40 年後に皺が生じるのである。このような常識人の考えを否定する説得力のある理由はないのではないと思われる。

時間部分は瞬間ごとに生成するだけではない。それは生成と同時に消滅するのでなければならぬ。時間部分の消滅を説明する物理法則はあるだろうか。サイダーは、そのような法則が存在しそうもないことを認めたうえで、四次元主義は必然的な真理なので時間部分は自動的に存在することをやめるのだと答えるべきだろうと言っている (Sider, 2001, P. 217)。

実際、痛みや音は自動的に消滅するように思われる。痛みや音に関しては生成と消滅は表裏一体であるように思われる。新しい痛みが生じたならば古い痛みは退かなければならない。先に聞こえる音は後に聞こえる音に席を譲らなければならぬ。たとえば、右の奥歯に重苦しい鈍痛とずきずきする激しい痛みが同時に感じられることはない。奥歯がずきずきと激しく痛み

始めたとしたら、それ以前に感じられていた鈍痛は消えてしまう。鎮痛剤を飲んで激痛が和ぎ、鈍痛に変わったときには、激痛は存在していない。同一の主体が同じ時間に異なった状態にあることは、単に物理的にではなく、論理的に不可能だからである。

痛みや音のような主体の心的状態だけではなく、物の物理的状态についても同じことが言えるだろう。ボールの表面温度が連続的に上昇し続けているとしよう。10℃だったのが20℃になり、やがて30℃に達する。こうして温度が上昇するとは、先の温度状態が後の温度状態にとって代わられることに他ならない。温度だけではない。色の変化や形の変化や固さの変化など、物のあらゆる種類の状態変化において状態の生成と消滅は表裏一体である⁶。ただし、生成と消滅とは言っても、文字通り、一つの個体としての性質が消え別の個体としての性質が生じる、ということではない。状態の生成消滅とは、物体の状態が変化するということを言い換えたものにすぎない。

同一の物の状態変化と、一見したところ似たような現象が、同一物を構成する素材に関して生じるケースがあるように思われるかもしれない。二十歳の頃の彼女はもういないと言う人は次のようなことを考えているのかもしれない。人を構成する細胞は刻々と入れ替わる。二十歳のころの細胞は今の彼女の中には一つもないかもしれない。だから、二十歳の頃の彼女は徐々に消え、新たな彼女にとって代わられているのだ。

しかし、状態が生成消滅を繰り返すことと人の身体において細胞が生成消滅を繰り返すことは似て非なることである。細胞の生成消滅の場合は、個体としての細胞が消滅し、それとは別の個体としての細胞が生成するからである。細胞が、文字通り、それとは別個の細胞と入れ替

わることによって人は持続的に存在しているのである。こうした細胞の生成消滅において、一つの細胞の誕生が、同一の生命体内における別の細胞の消滅を論理的に伴うなどということがあるとは思えない。細胞の消滅は論理法則によってではなく物理法則によって説明されるべき現象であるだろう。

それに対して、物の時間部分の生成消滅といったものがあるとすれば、それは、物や心の状態変化とも、さらには、細胞の入れ替わりとも異なる、比較を絶した現象である。四次元主義が正しければ、一個の細胞が存在し続けるとは、細胞の時間部分が生成消滅を繰り返すことに他ならないからである。一つの細胞が別の細胞に入れ替わるのではなく、細胞の新たに生まれた時間部分が同一の細胞の消え行く時間部分と入れ替わるのである。細胞を構成する原子も同じである。一つの原子は、その時間部分が生成消滅を繰り返すことによって存続しているのである。

それでは、物の時間部分の生成と消滅は表裏一体だろうか。時間部分の生成は、同一の物の先立つ時間部分の消滅を論理的に伴うだろうか。たとえば、同じ空間を同じ時間に複数の物体が占めることはできないだろう。ある物体がある場所に侵入してきたとすれば、先にそこにいた物体は場所を譲らなければならない。同様に、同じ物体の異なる時間部分は同時に同じ場所にあることはできないという法則が存在しているのだろうか。

たとえそのような法則があつたとしても、運動する物体や収縮する物体の時間部分の消滅にこの法則を適用することはできないだろう。運動する物体や収縮する物体は、運動や収縮の間中同じ場所にとどまっているわけではないからである。物体の運動とは、四次元主義によれば、連続的に新たな場所に時間部分が生み出され、

同時に、物体が占めていた場所にあった時間部分が連続的に消滅して行くことであるはずである。そして、この消滅を上る法則は説明できないのである。

あるいは、同じ場所に同じ物体の異なる空間部分が同時に存在することができないように、同じ時間に同じ物体の異なる時間部分が存在することはできないということなのだろうか。しかし、それは、時間部分は刻々と消滅して行くのだ、なぜか知らないけれども、この世界はそうのようにできているのだ、と言っているに等しいだろう。そして、サイダーの、時間部分は自動的に存在することをやめるという見解も、結局のところ、実質的には解答放棄と変わりはないように思われる。

時間部分の連続的消滅を説明する法則がないとすれば、物は生成消滅を繰り返しながら存在するという常識と乖離した四次元主義の見解を受け入れる必要性は大きく減殺されるだろう。

女性の顔を見ながら、二十歳のころの頬の赤さは消えてしまった、と思っている人がいる。その人は、細胞の交代を念頭に置いているのではない限り、二十歳のころの女性の頬が赤さごと文字通り消滅して、代わりに目の前の白い頬が出現した、と考えているわけではない。そうではなく、目の前の頬に以前はあった赤さが今は消えていると思っているのである。一般的な人間の持つこうした世界像を否定する合理的理由はやはり存在しないと言ってよいだろう？

物に関する四次元主義は、無用の問いを惹起することによって形而上学を混乱させているのではないだろうか。

注

- 1 時間部分の存在を否定する三次元主義と四次元主義は、物はどの瞬間においても余すところなく現れているのか、各瞬間に現れているのはその時間部分にすぎないのか、という点をめぐって対立している。この問題について、詳しくは星野 (2013b) を参照されたい。
- 2 時間の哲学に関しては、時制をめぐる A 理論と B 理論の対立、物の持続をめぐる三次元主義と四次元主義の対立に加えて、現在の対象しか存在しないとする現在主義と過去の対象も未来の対象も現在の対象と等しく存在するとする永久主義の対立があると一般に考えられている。そして、四次元主義は永久主義であるというのが標準的な見解である。ちなみに、ブライアーは現在主義の代表的な哲学者である。しかし、私には現在主義と永久主義の対立と言われているものが、深刻な形而上学的な対立であるようには思えない。
ネッシーは存在しない。恐竜は昔存在していたが今はいない。象は今でも存在している。ネッシーと恐竜と象の間のこのような存在上の身分の違いは誰でも知っている。現在主義と永久主義の対立は、結局のところ、単なる言葉の使い方をめぐる対立ではないかと思うのであるが、あるいは、現在主義と永久主義について私がよく理解していないだけなのかもしれない。
- 3 ストローソンは、音だけの世界において客観的世界の概念が成立しうるだろうかと問うている (1959, part1-2)。そして、巧妙な思考実験によって、音だけの世界においても空間概念に類する概念を獲得することは可能であること、また、個体としての音の認識も可能であることを示そうとしている。しかし、ストローソンの思考実験が成功しているとしても、そこで示されているのは、数的に同一の音を再認する可能性ではなく、一連の過程としての音の認識の可能性であるように思われる。同様の指摘はエヴァンス (Evans, 1980) にもある。
- 4 たとえば Shoemaker (1979)、Armstrong (1980) を参照。
- 5 主体概念の成立について、詳しくは星野 (2013a) を参照されたい。
- 6 四次元主義者は、同じ物が異なる状態にあることは、たとえそれが別の時点においてであっても、同一者不可識別の法則 (ライプニッツの法則) に反するがゆえに不可能であると考え。そこで、四次元主義者は異なる状態は異なる時間部分において実現されていると考えるのであるが、その場合は、なぜ新たな状態の生成とともに古い状態が消滅するのか不明になって

しまうだろう。

- 7 部分が入れ替わりながら存在する人や動物や人工物の通時的同一性の問題が哲学的に重要ではないという意味ではない。この問題に対しては、同一物の持続を時間部分の生成消滅と見る四次元主義とは別の解決法を見出さなければならないということである。

文献表

- Armstrong, D. M. (1980), “Identity Through Time”, in van Inwagen, P. ed. *Time and Cause: Essays Presented to Richard Taylor*, D. Reidel.
- Armstrong, D. M. (1997), *A World of States of Affairs*, Cambridge University Press.
- Chisholm, R. M. (1976), *Person and Object*, Open Court.
- Evans, G. (1980), “Things Without the Mind”, repr. in Evans, G. (1985), *Collected Papers*, Clarendon Press.
- Gorham, G. (2010), “Descartes on Persistence and Temporal Parts”, in Campbell, J. K. et al. eds. *Time and Identity*, The MIT Press.
- 星野 徹 (2013a)、「意識と主体」『埼玉大学紀要 教養学部』第 48 巻第 2 号
- 星野 徹 (2013b)、「持続と同一性」『埼玉大学紀要 教養学部』第 49 巻第 1 号
- Kim, J. (1976), “Events as Property Exemplification”, repr. in Kim, J. (1993), *Supervenience and Mind*, Cambridge University Press. (ジェグオン・キム「性質例化としての出来事」柏端、青山、谷川編訳 (2006)、『現代形而上学論文集』、勁草書房)
- Lombard, L. B. (2010), “Time for a Change: A Polemic against the Presentism-Eternalism Debate”, in Campbell, J. K. et al. eds. *Time and Identity*, The MIT Press.
- MacBeath, M. (1983), “Mellor’s Emeritus Headache”, repr. in Oaklander, L. N. ed. (2008), *The Philosophy of Time, Vol. III*, Routledge.
- Mellor, D. H. (1998), *Real Time II*, Routledge.
- Prior, A. N. (1959), “Thank Goodness That’s Over”, *Philosophy* 34.
- Prior, A. N. (1996), “Some Free Thinking about Time”, repr. in van Inwagen, P. and Zimmerman, D. W. eds. (2008), *Metaphysics: The Big Questions*, Blackwell Publishing.
- Shoemaker, S. (1979), “Identity, Properties and Causality”, repr. in Shoemaker, S. (2003), *Identity, Cause and Mind, Expanded Edition*, Clarendon

Press.

- Sider, T. (2001), *Four Dimensionalism*, Clarendon Press. (セオドア・サイダー『四次元主義の哲学』中山康雄監訳 (2007)、春秋社)
- Strawson, P. F. (1959), *Individuals*, Routledge.
- Thomson, J. J. (1983), “Parthood and Identity Across Time”, repr. in Kim, J. et al. eds. (2011), *Metaphysics: An Anthology, Second Edition*, Willey-Blackwell.